

講演「国際理解：海外勤務を通じた私の体験」

講師 小池 寛治 先生

帝京大学教授（前在オランダ特命全権大使）

1 はじめに

○マレーシアの日本人学校での出会い：
御南小学校長 斉藤輝三先生との出会い

2 39年間の外交官生活

○7カ国に勤務：日本と海外生活が半々：最後は UAE（アブダビ）とオランダ勤務

(1) 英国（1966～68 昭和 41～43 年）

○オックスフォード大学に研修留学：日本より人口の少ない島国ながら、さすが大英帝国を築いた国。食事身なりは質素、暗く長い冬と移ろいやすい天気：質実剛健さは気候風土から生まれたものか？

○夏休みを利用して学友とハンガリー・ポーランド・チェコスロバキアの東欧諸国を自動車旅行した。国境から次の国境まで近いことと、脱走者がいないかをくまなくチェックしていて、車の長蛇の列が印象的だった。東西冷戦の真最中だった。今や冷戦が終わり、ソ連が崩壊し、これらの国は欧州連合の加盟国になった。

(2) スイス・ジュネーブ（1972～75 昭和 47～50 年）

○スイスは、仏、伊、墺、独に囲まれた内陸国。4つの公用語があり、地方自治の直接民主制を取っている。ジュネーブから10分でフランスに入れたし、パスポートを見せる必要も無かった。長男が生まれて、離乳食にミルクとパンを食べさせていたが、一度フランスのパンを食べさせたら、スイスのパンを食べなくなった。スイスのパンはまずい。それは、国防上の理由。スイスは、小麦粉を一年分備蓄していて古い小麦粉から市場に出した。古米ならぬ古小麦。

(3) タイ（1980～1984 昭和 55～59 年）

○当時は、ほぼ毎年のように軍のクーデター騒ぎがあった。しかも無血のクーデター。国をまとめていたのは中央官庁や政党ではなく、全国的な組織を持っていたのは軍と警察だけだった。当時、クーデターは政権交代に必要な方式だった。今は、中産階級が増え、民主主義も定着した。しかし、昨年タクシン首相が率いる「タイ愛国党」がクーデターで倒された。民主主義が定着したと思われていたのに、再び「クーデター方式」が復活したのには驚いた。

○タイ人は仏教徒で温和だが、人前で恥をかかされると感情が爆発する。

○タイ語を覚えるのは不可欠だった。タクシーやサムローに乗る時にはメーターも付いてないので、値段の交渉をするが、英語で交渉をすると割高になった。市場でも同じ。

○二男が日本人学校に入学。長男は日本人学校の小2～5年まで在学。

(4) マレーシア（1988～90 昭和 63～平成 2 年）

○英国の植民地となり、英国式の官僚制度(官僚は高給を得ていたので目立った汚職はなかった)と都市のインフラが整っていた。上下水道に加え、生活用水として使う中水道もあった。

○ゴムのプランテーションや鉄道建設・運行にインド人を移住させ、錫鉱山の発掘のために中国人が移住した。人口の約半分が、土着のマレー人。3分の1が中国人。1割がインド人。宗教・風



習が異なり、お互いに住み分けていた（特に、マレー系を優遇するブミ・プトラ政策）：「モザイク」社会。

○マレーシアは3つの民族・宗教・文化をもった国：

1958年の独立後の1963年5月13日、マレー人が中国系の華僑を襲うという民族間の対立・暴動がおこり、それを再発させないことが最も重要な政治的な課題：同一化でなく、平和共存しかなかった。

○二男は日本人学校6年生の斉藤先生のクラス。長男は全寮制の日本の高校に残さざるを得なかった。私がマレーシアに何年勤務するのか、その後、日本に帰国するのか、あるいはどの国に赴任するのか全く分からなかったの、長男を連れていくのを諦めざるを得なかった。

(5) ニューヨーク(1990~93 平成2~4年)

○二男を連れてマレーシアから直接赴任。ニューヨーク郊外の住宅を家内がくまなく探したが、タイ人の友人の勧めもあり、マンハッタンに住み、二男はウィークデイ・ボーディングという月曜から金曜日までは学校の敷地内にある寮に寝泊まりし、週末にはマンハッタンのアパートへ帰ってくる生活を送ることとなった。

○二男は当初英語が分からず、クラスの友達から最初は“おし”ではないかと思われた。サッカーのストライカーだった。英語が聞き取れずに宿題をやっていかなかったら、放課後残され、その日のサッカーの対校試合は負けた。それから後、クラスメートたちは二男の宿題を助けるようになった。

○ハイスクール入学後3ヶ月位経った頃に、社会科で第二次大戦のことを習い、帰宅して「パパ、日本は本当にアメリカと戦争をしたの？」と信じられないような顔つきで尋ねた。毎日の生活で親しい友人関係からはおよそ信じられなかったのも無理はなかった。

○また、ある時は「アメリカの学校の理科の実験では、正しい答えは一つでなくていいんだよ！」と言った。私もわが意を得たりと、「そうなんだ、正解は一つでないことのほうが多いのだよ」と述べた。

(6) アラブ首長国連合(UAE)(1996~99 平成8~11年)

○大使としての初めての任地。(後述)

(7) オランダ(2002~04 平成14~16年)

○最後の勤務地。(後述)

(8) その他の国：本省勤務の時期や海外勤務の時に近隣国に出張。

○出張の際に時間がある限り、必ず行ったのは生鮮食料品を売っているマーケット。庶民の暮らしぶりを知る最も手っ取り早い方法だと思う。ベトナム戦争が終わり、南ベトナムは北ベトナムに統一された(1975年)。6年後に北のハノイと南のサイゴン(ホーチミン)に出張。マーケットをのぞいたら、ハノイでは煙草は一本・一本のバラ売り。ホーチミンでは20本入りの一箱・一箱で売っていた。同じ国の中でも生活の落差の大きさがわかった。

(9) よく聞かれる質問：「どの国が一番良かった？」答えは常に、「それぞれの国に特色があり、どの国も良かった。子供たちの成長過程と結びついた思い出が強い。」「でも、アラブの国では奥さんが大変だったんじゃない？」「アブダビの生活は、むしろ家内のほうが楽しんでいた」「ふーん！？」

○いずれの国も異なった環境と文化があり、思い出の友達に恵まれた。異なった環境に住み、むしろ日本のユニークさを自覚した。

○日本のユニークさ(多くの国と比較して)：

①島国であり、他民族に支配されなかった歴史：(アジアでは日本とタイだけ)

②一神教ではなく、多神教の国(シンクレティズム)：アニミズムや神道を基盤として、その上に外来の仏教・儒教・キリスト教が混合：暮れから正月の一週間に、クリスマスを祝い、除夜の鐘で新年を迎え、新年のお宮参りをする国は日本だけ。

③温和な風土・四季・地震・木材建築：日本の四季は、夏の湿度は亜熱帯並みで、夫々の季節に

備え衣類や寝具を備えるのに忙しい。

3. イスラム・アラブの世界

○大使として最初の勤務地：UAE・アブダビの生活(1996～99)

○国土は 84 千平方キロ：北海道とほぼ同じ大きさ

○砂漠・土漠，オマーンとの国境は山脈

○暑い（50 度近くになる）：暑さを通り過ぎ、じりじりと痛いほど、車のボンネットの上で目玉焼きが出来る。アブダビ・ドバイのようにペルシャ湾に面した地域は湿度が高い。砂漠の夜は寒い，昼と夜の気温の差が大きい。蚊は冬に発生する，10 度を下がる日もある。日本人小学校のプールは冬以外お湯になり，熱くて泳げない。

○UAE の 410 万人の僅か 2 割がナショナルズ。



(1) イスラムは一神教の世界：啓典の民

○絶対神の一神教：ユダヤ教，キリスト教，イスラム教はいずれも「啓典の民」。：イスラム教とは，神が人類に下した啓示を預言者（神の言葉を預かった人，ムハンマドは“最後にして最大の”預言者。モーゼもイエスも預言者。）

○イスラム教はムハンマド（571～632）が 610 年頃に神の啓示を受け，成立。ムハンマドはガブリエル天使と共に翼のある天馬でエルサレムより昇天。ムハンマドが預かり伝えた（後継者達が編纂した）「コーラン」と，モハメッドの生前の言行録「ハディース」から得られる知識が「スンナ」。これを主な法源とするのがイスラム法「シャリーア」。モハメッドは，長命，砂漠地帯で共同体・集団として生き延びる知恵も述べた。

○イスラム教徒のことを「ムスリム」というが，それは，「(神) に絶対に服従する者」という意味。神が全てのことを決める。「インシャーアッラー」（神の御心がそうであれば）。「アルハムドリッラー」（神様の御蔭により）。

(2) イスラム教徒・社会

○現在，イスラム教徒は全世界で 8～10 億人といわれ，その内の大多数を占めるスンニ派(ほぼ 9 割)と少数派であるシーア派からなる。スンニ派は，預言者ムハンマドのスンナに従う。ハディースが基本。イスラム共同体ウンマの政治権力であった「正統カリフ」，「ウマイア朝」，「アッバース朝」を正当なものとして認める。

シーア派は，カリフ（代理人，継承者）が最高権威者としてあるべきだとの考えにより，ムハンマドの娘ファティーマを娶ったアリーが初代のイマーム（指導者）と呼ばれた。シーア派は，ムハンマドによるスンナだけでなく，初代イマームのアリーから第 12 代のイマームまでの言行，伝承を含めてスンナを解釈する。「シーア・アリー」（アリーの党派）と呼ばれ，縮めて「シーア派」。

○神に祈りをささげることが最も大切，特に正午の祈り（ズフル）。集団礼拝の指導者がイマーム，男性でなければならない。

○ラマダン：「断食の月」ではなく，日の出から日没までは食事もたばこも水もご法度。しかし，日没後(直後はイフタル)から夜明けまでに 2～3 度食事する。友人宅や部族長宅を訪問し食事とともにする。“夜行性動物か！”と思った。ラマダン期間中の食糧の輸入量は大幅に増加する。

太りすぎを警戒していた。

- 女性の服装：イスラム女性はベールやアバーヤで肌と髪を隠さなければならない。男性は本質的に弱いので誘惑にならないようにする。
- 伝統的に結婚相手の嫁探しは男性の母親が決めていた，母親は強かった。最も好ましい相手は従兄弟(父方のいとこ)だったが，この風習はア首連でも大きく変化しつつある由。アラブの諺に「結婚はスイカのようなもの」，その心は，「割ってみないと分からない」，「当たり外れが大きい」というもの。
- お墓：人が亡くなると翌日中に土葬する。 お墓は，土を掘って土葬した跡に小さな石を置くだけの極めて簡単なもの。墓場にはたくさんの小さな石が立っていて，名前も何も書かれていない。イスラム教徒は死ぬと神に召され（神の御許に帰る），死体には何も残っていない。よって，お墓参りをするという事もない（そもそも墓に向かって祈るなどという行為は偶像崇拜につながる）（今流行の「千の風になって」の「お墓の前で泣かないで下さい，私はそこにいません，眠ってなんかいません」はイスラム教の影響か?!）

(3)UAE の独立と近代化

- 1968年1月．英国は，3年後にスエズ以東からの撤退を声明
保護国たる英国の撤退は，湾岸地域の首長に新たな統治制度と国防の必要を感じさせた。現在のアラブ首長国連邦の7首長国とバハレーン，カタールの9カ国はどうするか決断を迫られた。北の大国イランと南の大国サウジへの対処問題。（当初は9首長国連邦を作る構想。右構想を協議中に，カタール，バハレーンがそれぞれ単独で独立。）
- アブダビ首長のシェイク・ザーイドの知性と統率力（と経済力）により，連邦としてまとめられた。アブダビ首長とドバイ首長がリーダーとなって連邦を形成。
- ア首連の各首長国は，独自の行政府を持ち，緩やかな連邦を形成。7首長で構成する連邦最高評議会が大統領・副大統領を選出する。連邦評議会は40人で構成され，内20人は選挙で選出，残り20人は各首長が任命。

(4)UAE の急速な発展

- 1961年に海中油田から石油が採掘され，翌1962年に始めて輸出された。1960年代末に陸上油田の発掘
- 石油輸出収入を用い，国の近代化を促進：道路，建物，港湾の整備，海水の淡水化と水道の整備：道路の両側と中央分離帯にパーム（ナツメヤシ）の街路樹（点滴水），文字通り，「ぼろをまとった暮らしから，一世代で裕福に」
- 建国当時は，水道が全くなかった。ザーイド大統領は「全ての国民に水道水を供給する」と宣言。今や一人頭の水道使用量は世界一。⇒水の価値を知らない国民も⇒昨年各地で節水キャンペーン。
- ドバイは脱石油化に邁進（石油生産は16万b/d）貿易，運輸，観光，情報産業に活路。開放的政策により巨額のオイルマネーを導入。①都市建設（インターネット・シティ，金融特区），②観光開発（世界最高層ビル建設，人口埋立地・島群建設，巨大リゾート・ドバイランド建設，新交通システム，ドバイ・メトロ建設など），③国際会議，見本市，ゴルフ（PGAツアー）など
- ジュベル・アリ・フリーゾーンの成功：85年に操業開始，外国資本の100%出資も可。5千社以上，日系企業93社が進出。巨大なコンテナヤードの貨物扱い量は中東第1位，世界第10位。
- ドバイ国際空港は，中東・アフリカ・欧州・アジアを結ぶハブ空港。エミレーツ航空は59カ国87都市に運航。エミレーツ航空は，関空と中部空港に双方向で週28便，日本人は60日間の観光ビザは空港で取得（30日間の延長可）ドバイ訪問の日本人は01年の24.6千人から05年は，59千人に急増中。
- 在留日本人：2300人：ドバイに1700人，アブダビに600人
- 日本人学校はアブダビ，ドバイにある

(5) 変わりゆく価値観

① 貨幣に対する価値観

○貨幣に対する価値観が変わった。商品の選択範囲が広がり、よりベターなものが手に入るようになった。⇒「富の備蓄」特に株、土地、資産運用：夏休みのバカンスを海外で過ごす、かつては富裕層しかドイツやフランスなどに別荘を持っていなかった。



(2) 中東諸国の色んな文化：中東諸国への旅行

(イ) オマーン

○アブダビから隣のオマーン王国の

首都マスカットには、車で朝発つと夕方には着ける。マスカット市の海岸には岩肌がごつごつしているのが印象的だった。オマーン人は人懐こく親切だった。私が自分で車を運転して、オマーン的首都マスカットに向った時に、ワジの水かさが増し、スロープのように下ってまた上っている道路は完全に水の下。

○ワジ：“涸れ川”のこと、雨期にだけ水が流れ、乾季には水は一滴も見えない。雨期に激しい雨が降ると川は急に鉄砲水になる。水がほとんど流れていない川に、「水泳禁止」の立て看板があった。

○ワジは、膝以上の深さ、「さてどうしたものか？」6~7台の車が立ち往生しているのが見える。また、見物していた人達が膝まで水に浸かって車を押している。「よし、これは何とかなる！」と思えばスピードを出して勢いよく水に突っ込む、しかし、運悪くというか、矢張りと言うべきか、立ち往生。アル・ハムドリッター、周りにいたオマーンの人達が4~5人でクルマを押してくれて窮地を脱出した懐かしい思い出。

(ロ) サウジアラビア

○メッカ、メジナのイスラム教の聖地に入れるのはイスラム教徒のみ、毎年ハッジの季節になると全世界からイスラム教徒が何百万人も集まってくる。

○リヤドに飛行機が降り始めると、イスラムの女性もイスラムでない女性もいっせいに身体を覆うアバーヤと髪を隠すベールを被る。首都リヤドの宗教警察はうるさかった。リヤドの商店街を妻と二人で見物していると、鞭のような杖を持った男が近づいてきて、アラビア語で何か言っている、杖の動きから察するに「お前の連れは女性、くるぶしを出してけしからん、肌を見せないようにちゃんと気をつけろ！」と妻ではなく僕が注意された。サウジは、女性の一人歩きは駄目、車の運転も駄目。

○イスラム教の宗派の中でも厳格な戒律で知られるワッハーブ派が、サウド王家と結びつき政教一致の治世を行っている。豚とアルコールは厳禁。サウジ王国の中には、アルコールは一滴も存在しない建前になっている、非イスラムもそれに従わなければならない。リヤドにある日本大使公邸に呼ばれることは在留邦人にとっては嬉しい出来事。それは喉から手が出るほど飲みたいアルコールを大使公邸では飲めるから。歴代の日本大使は客をもてなすために、大量にビール、ウィスキー、ブランデーを輸入した。しかし、輸入品を申告する際に、“アルコール”とは書けないので、常に“ピアノの輸入”と申請して輸入許可を得てきた。これは建前の世界。サウジの税関もピアノでないことはよく承知。もしピアノの輸入が事実だったら、日本大使公邸にはピアノが何百台もないとつじつまが合わない。

(ハ) イラン

- ほぼ 20 年後の 1998 年に観光旅行に行ったイランは全く様変わりしていた。イスラムのお坊さんが支配する国、政教一致の国になっていた。アバヤとベール（イランではチャドルという）で髪を覆い、身体の線を見せないようにする国。テヘラン、シラズ、イスファハン（ペルセポリス）を観光旅行。イラン人の女学生に囲まれてこちらが日本人だと分かったら「おしん！おしん！」と呼んで取り巻く。好奇心は変わっていないのだ。（イランは、イスラム教が入ってくる前はゾロアスター教（拝火教）の国であり、「ワインとバラ」の国。アルコールの入っていない“ビールもどき”はあるけど、アルコールを飲めないのには、参った。）
- イランはシーア派が大多数（イラク、クウェイト、バハレーンも同じ）。

(5)イスラム諸国の理解

- 同じイスラムの国であるが、“差異”が見えてくる。UAE と比較して理解していた：勤務国の UAE が、近隣国を理解する“座標軸”になっていたことに気づいた。特に、観光客だったので、『イスラムでない異教徒（即ち日本人）に対する寛容度』の違いを強く意識した。

(例)：

- 女性の服装(アバヤ・ヒジャーブ)：サウジ・イランはイスラムでない人を含め全ての女性がアバヤで髪と身体を覆う必要がある
- 食べ物・飲み物(特にアルコール)：街のスーパーマーケットの一角に、入り口は目立たないが、アルコールショップがあり、中に入ると品ぞろえが豊富だった。また、ハムやソーセージなどの豚肉製品もマーケットの中に目立たないように陳列されていた。
- 男の社会と女の社会：
- 日本週間の開催は UAE の人に異文化体験をさせるイベント
- ユニークな試みは、入場者は女性だけにしたレディースデイを設けたこと：アブダビの女子短期大学の学生を招待し、バスで送迎。レディースデイの前日にシェイク・カーシミー経済大臣を主賓として大ホールでの演奏を観覧中に、ポケットの中の携帯電話が鳴る、外務省の儀典長からの電話「小池大使か？明日のレディースデイにはシェイハ・ファティマが出席されることになった。くれぐれも粗相のないように！頼んだぞ！」。シェイハ・ファティマはザイド大統領のファースト・レディー、その息子たちは夫々シェイク・ムハマド国防大臣、シェイク・ハムダーン外務大臣（代行）、シェイク・アブドラ文化スポーツ大臣の要職にあった。
- シェイハ・ファティマの来訪となると、女性警官が犬を連れて物々しい事前警備、男子は全て入館禁止。さて、心配の種は、和太鼓をどうするか？演奏者は男性、おまけにもろ肌脱いで演奏は許されるのか？⇒アブドラ大臣に事前相談、「もちろん大丈夫だ！あの太鼓を、是非、お袋に聞かせてやってくれ！」⇒和太鼓は好評

4. オランダ：最後の赴任地

- (1)歴史：カトリックのスペインから戦争を経て独立：カルビン派のプロテスタントの国、しかし、南部はカトリック教徒が多数：難民を受け入れてきた歴史(メイフラワーに乗り込んだプロテスタントも最初はオランダのライデンに集合し、英のプリマス港に集合し、アメリカ大陸に向かった)：
- 通商国家、オランダ式な合理主義：ダッチアカウント(割り勘)が基本ルール：「古着でも古い道具でも全てお金を払わなくては手に入れられない、ただ一つの例外は太陽の光、これだけがタダ。」
- 個人主義、歯に衣を着せずにストレートにものを言う

1. 日蘭は 400 年以上の友好の歴史を持つ国

(1) 九州との深い縁

- －1600：オランダ船「デ・リーフデ」号が大分の臼杵湾に漂着：船長はオランダ人のヤン・ヨーステン
- －1609：徳川家康はオランダに貿易許可の朱印状を与え、貿易が始まる。オランダは、平

戸にオランダ商館を築く（同年インドネシアに東インド会社が設立される）

ー1641：オランダ商館は長崎の出島に移転させられる：出島はポルトガル人を隔離するために埋め立てて作られた人工の島：ポルトガル人の退去命令が出され、無人島になっていた。短い橋をわたり対岸の長崎の街に行くのにも事前許可を貰い、料金を支払う必要があった。家族を伴うことも許されず、出島に入ることを許されたのは、通訳と丸山遊郭の女性たちだけ。オランダ人は、平戸の生活を懐かしく恋しく思った。

ー鎖国時代、日本にとり、出島は世界・西欧の事情を知る唯一の窓であった。オランダ商館員にとっては、年に一度（後には4年に一度）、将軍へ拝謁するために江戸に大阪から陸路で旅行するのが喜びであった。オランダは、毎年世界の情勢報告書を幕府に提出した。

ー日本語になったオランダ語：マスト，ポンプ，ビール，ランドセル，オテンバ，（博多）
ドンタク：ヤンヨーステン⇒ヤンヨスさん⇒ヤヨス⇒八重洲

(2) 日蘭の長い友好の歴史の中で、大きな汚点は第2次大戦（太平洋戦争）中、日本軍が（バタヴィア、現在の）インドネシアを占領し、オランダ軍人4万人（うち約1万人死亡）、オランダ市民9万人（内約1万2000人死亡）を強制収用所に閉じ込めたこと。特に、軍人捕虜をタイ緬鉄道の建設、次いで日本国内の炭鉱で強制労働に従事させたことは、国際法規違反。

○日中戦争になり、日本軍は仏印に進駐。米はこれに対して石油輸出を禁止。日本軍は南方の油田を確保するために、オランダ領東インド（インドネシア）を攻撃し、落下傘部隊でまず油田地帯を抑えた。

○戦争被害者グループの一つは、今も毎月大使館前でデモをし、総理宛に陳情書を持ってくる：代表と会い、話し相手になるのが大使の重要な仕事だった。

○他方、北九州市南西の水巻炭鉱で強制労働をさせられた元オランダ軍人ウィンクラー氏は、自分の歴史を振り返る旅に出て水巻町を訪問した際、強制労働をしていたときに親切にしてくれた日本人の監督者と再会した。二人と水巻町の人とは合同して死亡したオランダ軍人の慰霊碑を立てた。その後、ウィンクラーさんは毎年水巻町を訪問し、日蘭間の友好に貢献してくれた。もうすぐ90歳。

○オランダ人従軍慰安婦問題の解決には、オランダ側の協力を得て、アジア女性協力基金から資金やサービスを提供し、総理からのお詫びの手紙を渡し一件落着いていた。しかし、最近アメリカの下院で従軍慰安婦の訴えを聞き、決議を通す動きが起こり、安倍総理の発言とともに再び問題になっている。

2. オランダという国

(1) ヨーロッパでは、独・仏・英などが大国で、オランダは広さは九州とほぼ同じ広さで、人口は1600万人。世界一人口密度の高い国。しかし、街の中は家が建て込んでいるが、一歩街の外に出ると回りは牧草などが広がる田園地帯になる。農業の生産性は高い：家畜、酪農製品、や大規模な温室には目を見晴らさせられた。縦200メートル、横200メートルの温室は、温度、光、水など全てコンピューターで制御されていて植物や花々の生産工場といえる。生産高で言うとオランダの総生産高の2%程度だが、輸出に占める割合になると農産物とその加工品で20%を占めている。



(2)水との闘いの歴史

1932年に完成し、南の大堤防は1973年の大洪水の後に作られ86年に完成。)全国の川や運河の水位は全てコンピューターで集中的に管理・制御されている。古「神様がこの地球と世界を創造した。オランダはオランダ人の手により創られた。」オランダに住んでみると、なるほど、と思う。国中が川や運河で網の目のように張り巡らされている。道路より高い天井川はどこにもある。オランダでは、先ず浅い湖や川に沿って堤防を築く。次いでその水を一段高い川にくみ上げる、これを繰り返して海に流す。そのための動力が風車だった。かつては国中に風車が1万基も在った。(32キロメートルに及ぶ北の大堤防はくは12世紀からこのような国作りを行ってきたので、オランダの国土の3分の1は、海拔ゼロメートルよりも低い。また、国民の3分の2はそこに住んでいる。(ボートの中で寝泊りし、生活している人もいる。アムステルダム川の運河には、係留されたボートに電気や水道を引いて住んでいる人達もいる。)

○チューリップ栽培：チューリップの球根を育てるのには7~8年かかる。キューケンホフ公園は2~4月に開園。チューリップなどの球根は3層に植えられている。

(3)オランダ人画家：レンブラントの夜警、動きのある生き生きとした人物の表情の描写。自画像など多作。それに対し、フェルメールは生涯にわずか24しか作品を残さなかった。「ミルクを注ぐ女」：現在上野の美術館で展示中。ゴッホはオランダ生まれ、当社は庶民の生活など暗い画風だったが、パリに行き印象派の影響を強く受けた、特に、日本の版画・浮世絵を自分なりの画法で模写した。

(4)オランダの街作りー地震のない国：オランダは街を一步出ると田園風景になるほどに街と田園が区画されている。

○デルフトの新教会はオランダ王室の墓所でもある。女王の夫君のクラウド殿下、先代のユリアナ女王の葬儀に参列。日本からは秋篠宮両殿下が参列。回り会談で一番上まで登る。市庁舎と広場。広場には市が立ち、お祭りもおこなわれる。街の風景には運河があり、赤れんがの町並みが整然としている。建築・改造には町的美観委員会の許可が必要。地震がなくレンガ作りだから何世紀も続く。

(5) オランダはヨーロッパへの玄関口

○アムステルダムの南のはずれにスキポール空港がある。滑走路が現在5本あり、更にもう一本を海上に作るかどうか検討している程。ロンドンやパリのような大都会にある空港との違いは、この空港に着陸する乗客の半分以上は、この空港では降りずに乗り継ぎに利用しているだけ。これこそハブ空港。空港の中には各種の売店だけでなく、乗り継ぎ客用に、美術館の分館を作り、寿司バーやスポーツジムもある。

○ロッテルダム港。ロッテルダム港の貨物取扱量は約4億トンで世界一。川の下流が港になっているので、川に沿って現在約20キロメートルが港になっている。更に沖合いに港を拡張する計画もある。両岸には石油タンクや化学工場などさまざまな工場が並び、ヨーロッパ最大のコンテナヤードがある。このロッテルダム港にいったん荷揚げされた貨物は、水路、鉄道、道路のいずれかを使って欧州の内陸部に輸送される。

(6) 貿易立国

オランダは昔から貿易で富を築いてきた国。今日もその伝統が国民に染み付いている。モノやサービスの売買については、よく言えば合理的、悪く言えばとてもけち。無駄な金は1ユーロも出さない。しかし、目的がはっきりしていれば、福祉活動にも思い切って寄付する。日本企業も200社以上が進出している。日本の輸出超過が続いている、しかし、これには再輸出も含まれる。対欧州の投資では、英国と1, 2位を分け合っている。

(7)オランダ独特の社会制度、

オランダは麻薬、売春、同性婚、安楽死が合法化されているユニークな社会制度。

(1) 麻薬。マリファナ、ハシシ等常習性がないとされるいわゆるソフト・ドラッグの販売する店が大きな都市では許可されている。その名は「コーヒー・ショップ」：但し、ヘロインなど

のハード麻薬の販売は禁止。また、アルコールは販売出来ない決まり。(ヨーロッパへの麻薬の密売ルートの「抜け道」となっているとして、特にドイツは強い取締りを求めている。)

- (2) 売春。大きい都市では、売春する店を認め、赤線地域を設けている。店の外には赤いランプが付き、遠くからも分り、大きな窓越しに女性を見ることができる。東欧諸国からの出稼ぎ者も多い。彼女たちは組合を作り、税金もちゃんと納める。定期的な健康診断も義務付けられている由。警察当局は、犯罪組織と結びつかないように監視。また、街によってはハンディキャップの人への割引の日まで設けているというから驚き。

- (3) 同姓婚。

○男同士、女同士が同居することは多くの国にあるが、オランダでは、同性同士が結婚することまでも法律上認めている。議会の第1院の議長も同性と結婚している。こそこそ隠す必要がない風土。

○大使館の行事や公邸の食事に招待するとき困った。一緒に招待しないわけにはいかない。

Mr. and Mrs.ではなく、Mr.X and Partner, 即ちワイフではなく「パートナー」が広く使われている。

○オーストラリアの大使が着任したときにオランダ外務省も困った。大使の伴侶は同じ男性だった。信任状を女王陛下に奉呈するときに、夫人を同伴するしきりになっているが、男性の大使の「夫人」が同じ男性だった初めてのケース。

- (4) 安楽死。

○安楽死を法律上認めている唯一の国。(国レベルではないが、アメリカのオレゴン州は認めている。) その代わりに、安楽死を認める要件をきちんと定めている。例えば、病気が不治の病であること、安楽死を本人自身が望んでいることを正常に判断できる状況の中で文章で確認していること、苦痛が激しいこと、別の医者も同じ医学的な判断であること(セカンド・オピニオンを求めることを義務付け)など、きちんと検証できる制度を作っている。

- (8)社会制度の背景—個人主義, 開放主義

- (5) なぜ、オランダではこのような制度が認められているのだろうか?オランダ人の中でもこれらはあまりにも行き過ぎだとの批判がある。

○私の考えでは、オランダのプロテスタントが、カトリック王国のスペインと戦争をして独立したこと、即ち当時のヨーロッパでは異端児だったことや宗教上、あるいは政治的な迫害を受けた人を難民として受け入れてきた長い歴史とも関係していると思う。(第1次大戦後、敗北したドイツ帝国の国王(カイザー)の亡命を認めたこともある。)個人主義が徹底している。つまり、ある人の信念がその他の多くの人との信条と異なっても、個人の意見は尊重し、共存する方法を考えるという国民性があるからではないかと思う。

○更には、様々な欲望を持つのが人間であり、見て見ぬ振りをするよりも、欲望は欲望として認めて、秘密の中でこっそり処理するよりも、むしろ表に出してコントロールすることが、社会としてはより健全だという考えが根底にあると思う。

○オランダ人は素朴で、飾らず、齒に布を着せずストレートに物を言う、開放的であり、住んでる家も大きなガラス窓がありカーテンは閉めず外から見通せる家が多い。

5. 異なる文化・文明

- (1)宗教:日本人には、特に一神教の世界の理解が難しい:価値観の差—例えば、お墓、不浄な左手

- (2)言葉:自分が属するグループと他者が属するグループを区別する大きな要素:複数の言語を持つ国も多い:“日本語”を“国語”と呼ぶのは例外の部類(Japanese, National language, Official language)

- (3)民族:古来、民族は他の民族を征服し、或いは、他の民族を移動させてきた。先住民の運命は、別の地に移転するか、同化するか、消滅した。特に、地続きのユーラシア大陸では、民族の移動が繰り返された。

○新大陸の発見以降は大規模な奴隷貿易によりアフリカ人が多数中南米地域に強制移住させられた

○東西冷戦が終わり、軍事的には一極となり、市場経済、資本主義、人権、民主主義が普遍的な価値とみなされるにいたった。他方、イデオロギーの裏に隠れていた民族・宗教の違いによる紛争が表面化した。サミュエル・ハンチントンが唱えた『文明の衝突』の様相が濃くなっている。

(4) 風土・文化

(5) 異文化の理解

○日本の歴史・文化について語れる発信力が求められている。かつては、日本が先進国というイメージが無かった時期には「雪が降る国・日本」をイメージとして売り込んだ。刺身もかつては、ゲテモノ食いの代名詞だった。パブリック・ディプロマシーが求められる時代。

○異なった文化を理解するための座標軸は、まずは日本の文化と歴史を知ること。

○英語教育について：英語は国際的なコミュニケーションの道具：英語の授業が入試の為であり、コミュニケーションの為だということが疎かになっているのではないか：ネイティブで英語を教えていた人のコメントとして、「日本の学生は質問に答える能力は高いが質問はうまくない、クリエイティブな質問をする能力を高める必要がある」と述べていた。

○外国語の訛りのある発音（表現）であっても内容が充実している方が、中身のない流暢な英語よりも良い。

(6) 海外赴任と子女教育

○私の場合も海外へ赴任する時の子供の年齢によって対応が異なった。一般的には、低学年はよりやさしいが、高学年になるほど困難になる。その理由の多くは、受験勉強にある。

○日本の受験制度、特に大学の受験・卒業制度は抜本的な改革が必要。学期の途中での編入制度も必要。

○日本の会社のグローバル化と海外進出により、特に中国・東南アジアへの海外赴任が増加している。

(7) グローバリゼーション

○グローバルな経済：貿易、投資、観光、低くなる国境の壁(プラス・マイナス面)

○マス・メディア、IT 革命

○海外留学生数：250 万人(2004)から 450 万人(2020)に増加する見込み

(8) 時代の変化

○日本の制度のグローバル化：外国人にとって魅力的な国、住みたい国：日本。

ウィンブルドン現象を恐れてはいけない：大相撲 力士全体に占める外国人の割合は 8%，幕内 30%，横綱 100%。柔道もしかり，“外国人枠”の撤廃を進めるべき。

